

春色戀廻 漆分解卷之下

江戸

朧月亭有人作

第五回

流石無花の柳川岩も子刺さてゐるの淋しく針や

控磨のその外ハ岸うり水のさるをうりある船富の二

階ふもいと志あやうふ終り入ハ胡人あゝととと小万免

角脚も理よおちて終よととと何と中々望よ涙ぬ

ありやつひふ怒りてええととと何と何と何と何と

かまのどめのみらぬーたの工六おしゆあませんたれども物ご

りもと遠つてあまのぶくをのうるかまごうるか用のこをもち

毒のひととるひまーうう井ト結伴の神もて酒成拭て

かるーうそだううをねまつまう経人こふはるさるを物

う酒も理よあちくうまくね入一ツ敵でくんま下茶碗を

物ま一フヤマアうんる物で毒ごヨ猪口でおあがみるいヨ

イヤるゆさるのんぢや面割どのやあう一人でづくろ多糖利

と借る一史ぢやつだまうヨ一壺つだね入一はひふ

あのおおもん何れしものえりぐ浮山お願る一丈お

さう法中う若利来し附おめ入あうためで何れあると云

が物ぞ今ハ先先がううう止ませう笑ひひ

関ね下ハ持ぐううの何れなうぶうきてえね入一丈お

何れしものえりぐ後張おきであの何う後を立ちやうなる

何れしものえりぐ後しき中うまうおやあしせんそれとも後

とおきでうう何れしものえりぐ何れしものえりぐ

さハだせうう何れしものえりぐ何れしものえりぐ

あしん

うち

まごねん

らへ

らへ

らへ

安んじてお毫もよし私も又掃きんふらまじし事由

世のこ

ふろ

あひ

いそ

とた

あそ

精進したんと勤て、まきくおまへのお出の御いゆるりと控ふ

かうふまきへつ「ある程おまへのいふあり己が毎日とじしと

ま

むご

とふ

あま

まのまぢ

来ちやア自然と産あふあくあり宅のてまへ由りらり

ま

せん

ざん

すく

うち

らうましてお茶の身の皮成をたよ来るも同あご成丈

ま

と

く

ごうせん

あひら

来ねくかうふはかうヨ「ア、リ」及指安ちやらや」物おあま

こ

い

下

ま

み

をんが来るうら私が望まふ成ううまてとり入りぢぢやア

く

い

あ

それ

あませんが今か咄やしく、と世およ衣被とあさゆらと見え

あま

いま

あま

せん

い

と

まが身まがみ分のまが彼あるりとりありおりまりちりんりのり身みのりうりふりそりんりるりとりをり

もあいついこい目めあいやい私わのい自じ分ぶのい志しをいういこいといさいさいういういおいまいちいんいのい

人ひとがいういかいらいぎいういでいもいしいていまいにいじいまいんいがいていあいちいちいあいんいといかいをい

みみちみるみおみ金かねさんみがみさみぞみ私わがみ情なさくみもみあみりみ又また怒いらみくみもみおみあみんみ

ああまあらあるあごあらあうあとあ思おもいあ痛いたむあ女をのあ心こをあうあらあうあまあらあうあああのあ心こをあ誠まこと若わか者ものをあ

ああそあおあ角かくらあうあしあてあ来きてあおあ呉くれのあ心こをあ懐なつかかあらあうあくあツあちあああアあ

つつまつらつうつあつのつ心こをつ涙なみだツつらつうつ懐なつかかつらつうつおつ呉くれヨよ「こライこおこあこ人ひとのこ

ぞぞとぞいぞふぞをぞおぞ金かねさんぞとぞあぞんぞるぞ奴やつのぞこぞいぞおぞらぞびぞみぞもぞ物ものとぞ



小万

時鳥
 如
 其角

花雪



其角
 如
 其角

えん

まじあやえん さま

昔もさんま^ト又兼焼み酒とついでくつこのむ

「ラヤマアム

体あつて成むるなる子おまさんぐらゐるささるみお内室

さんハあんまう^{えんと}海山あうらうと^{あち}参あの人^ああません

どうでもらゆるお金の^{あつち}と成形よりけと参むともらぢぢや

お入り^{ちうす}「どうもおまさん^{ちうす}の柄おぐらつものやうをあまさせん

がどうらみ^まこせどう^まあるうらうお^{たま}ゆ^あ「そん

あふ若^{くらう}あう^{くらう}せさう^{くらう}が^{くらう}あう^{くらう}む^{くらう}笑ッて^{くらう}是^{くらう}なる^{くらう}さん^{くらう}る^{くらう}生^{くらう}別^{くらう}

新^{あま}彩^{しん}う^く油^くッて^くする^くと^くと^く者^くの^くピ^くち^くく^く流^くてる^くの^くふ^くを^く重^くが^くお^くお

あつらひ 継母のらみあむ きる状方うまともおふあめとゞて奥人
いもろあむあむ 里方へゆき 継母あまきとらふらうまのり
あま 中為のあひ 咄せうらうまふきる状あま持せうま
あま 今ほへあふえんて 酒心ゆ飲心 居るせうらうあめひ
あま 出くゆあまをさぐらうまへと 又ゆ茶碗ふ徳利の酒をつる
とあせー史 一カレサあまごちのたまけりよまあせう史ハ
あま さまうとさんせいをみるまのあ人あう 一のあ入あ
あま 是と人のあゆあゆあゆの境とせうらうとらあれいさうあ
あま

おまじしんがらんて驚ッしあされ方是みんかうまのあ

こでせうむ松があるゆふ始修つまうるのこでゆかるひ

のり知りませんがゆめくもか園りからう「たに之をみや

乳母もあつ己の身みさうちやア却ッて元夕掛ひヨまてが

書ふのかあーさよふ志ふか女と内人入まるとのみ妖あや

のあひうらつそのこまは物ふあらうと二人を母バ吏とを

中屋をまよとも宛せふ附在球はくくまをるのう「そのや

物とかかまあうみ年が六本へもはませうが中しく松の

かうる何れも由出来あるものだからまゝに可のやうな人を

肉の如きおれもさくもあつたやうなまゝせんといふくせんを

由ま婦といふ人といふまゝにさくまゝにさくまゝにさくまゝに

さくまゝにさくまゝにさくまゝにさくまゝにさくまゝに

笑ハせるのが何より想ひつゝなまゝにまゝにまゝに

一生の経験はさくまゝにさくまゝにさくまゝにさくまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

外はまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

つるる己ぢこのめ残のこりぬあまこの唄うた女に元をと女に房をふ持もつるる

おおかかつつよよいいろろううままくくトト満み身み残のこつつ 万ま一いアアレレササちち指さぢぢややああまませせん

ヨヨおおままちちんんハハ分わららああいいヨヨ 一いぢぢををおおららふふ分わららああんんヨヨトトフフととああるる

万ま一いぢぢううららいいぶぶかかううららいいかかととままぢぢやや私わがが國くにののままままここアア子こトト 相あいいひひ

おおらららら一いぢぢんん鶴つるトトケケココッッココウウリリ

小こ万まハハ万ま理り又またここととくく一いぢぢんん 万ま一いぢぢんんハハ悪わるいい者ものああるる男おとこ

ぞぞととささままししめめんんああままととどど電でん別べつ離り者もののの情なさけ念ねんをを

大お智ち由ゆかかへへッッとと愚ぐとと後のちトト分わ別べつたたちちままちちをを

分判ぶんぱんとある人ひと小方こまへハ元もとよりより候しある人ひとふ徳とくのありく
 名書なせうが身みのう人ひとをただがう人ひと中ちゆうもあけよれと紳しんや公
 みののるるあるま公こうあままばおくの矣い見けんがありたまま
 もあままどまはあいいななううのの結むすぶのトとままりりし
 かるかららひとひととと遠とほくくはは其その中ちゆうのの実じつ義ぎととももいいふ
 登のぼりり予よハは子このの及およぶぶままううととななれればば者もの宿しゆくのの好こう
 男おとこ子こふふはは助すけとと形かたちををととりりふ

第六回

忘らるる身も六思六志ちるひて一人の命れをいとも

何るかる故のうろく持らる必はらと六ねど神くせ誓

ひふまきしそ人ふりや罨でも何ういせぬくと都

く男の必れ人か業トらるるとらるるあうんか

切あるこの業も我必のう人と成りよるるお重六善く

と人のそこのこもあみ成今と父徳をよと親里へゆると

ふはるるよりある状さ人もよこしとまは合ふとえん

まへなるに只明考よ米河のまふふれりされて重た病は

忘らるる

身も

六思

六志

ちる

ひて

一人

の命

れを

いとも

何る

か

る

故

の

う

ろ

く

持

ら

る

必

は

ら

と

六

ね

ど

神

く

せ

誓

ひ

ふ

ま

き

し

そ

人

ふ

り

や

罨

で

も

何

う

い

せ

ぬ

く

と

都

く

男

の

必

れ

人

か

業

ト

ら

る

と

ら

る

あ

う

ん

か

ら

る

切

あ

る

こ

の

業

も

我

必

の

う

人

と

成

り

よ

る

る

お

重

六

善

く

と

人

の

そ

こ

の

こ

も

あ

み

成

今

と

父

徳

を

よ

と

親

里

へ

ゆ

ら

と

重

た

病

は

ま

へ

な

る

に

只

明

考

よ

米

河

の

ま

多^{あつ} 旅^{あつ} されば^{あつ} あつぬ^{あつ} 中^{あつ} 心^{あつ} 母^{あつ} 親^{あつ} へ^{あつ} 言^{あつ} 入^{あつ} 欲^{あつ} せん^{あつ} 其^{あつ} 似^{あつ} ず^{あつ} ぐ^{あつ} 由^{あつ} あり^{あつ}

あつぬ^{あつ} と^{あつ} ま^{あつ} あ^{あつ} 中^{あつ} ふ^{あつ} り^{あつ} け^{あつ} り^{あつ} け^{あつ} 元^{あつ} よ^{あつ} して^{あつ} 筆^{あつ} 紙^{あつ} せん^{あつ} ぐ^{あつ} なる^{あつ} ぐ^{あつ}

母^{あつ} 今^{あつ} 貞^{あつ} 六^{あつ} だ^{あつ} の^{あつ} ぶ^{あつ} 顔^{あつ} つ^{あつ} 死^{あつ} ぐ^{あつ} 様^{あつ} 中^{あつ} う^{あつ} ぶ^{あつ} う^{あつ} う^{あつ} 精^{あつ} 物^{あつ} 一^{あつ} へ^{あつ} 業^{あつ} せ^{あつ} 活^{あつ} 命^{あつ}

さ^{あつ} じ^{あつ} して^{あつ} 何^{あつ} も^{あつ} せん^{あつ} あ^{あつ} ふ^{あつ} ら^{あつ} ぶ^{あつ} く^{あつ} と^{あつ} 母^{あつ} の^{あつ} 方^{あつ} さん^{あつ} なる^{あつ} あ^{あつ} ん^{あつ} だ^{あつ} の^{あつ} ま^{あつ} へ

使^{あつ} あ^{あつ} 甚^{あつ} だ^{あつ} き^{あつ} う^{あつ} り^{あつ} よ^{あつ} り^{あつ} の^{あつ} 所^{あつ} 中^{あつ} う^{あつ} ふ^{あつ} 私^{あつ} が^{あつ} 貴^{あつ} 姓^{あつ} お^{あつ} う^{あつ} り^{あつ} け^{あつ}

死^{あつ} 紙^{あつ} け^{あつ} り^{あつ} 甚^{あつ} だ^{あつ} 甚^{あつ} だ^{あつ} の^{あつ} ま^{あつ} へ^{あつ} 中^{あつ} 心^{あつ} 一^{あつ} 母^{あつ} が^{あつ} 一^{あつ} 筆^{あつ} 紙^{あつ} の^{あつ} ち^{あつ} ち^{あつ} あり^{あつ}

母^{あつ} も^{あつ} よ^{あつ} り^{あつ} の^{あつ} 所^{あつ} 中^{あつ} う^{あつ} り^{あつ} あ^{あつ} と^{あつ} り^{あつ} 入^{あつ} り^{あつ} 一^{あつ} 筆^{あつ} 紙^{あつ} 一^{あつ} 方^{あつ} せ^{あつ} り^{あつ} け^{あつ} 紙^{あつ}

と^{あつ} り^{あつ} 笑^{あつ} ツ^{あつ} 一^{あつ} 死^{あつ} 命^{あつ} 一^{あつ} 母^{あつ} 上^{あつ} さん^{あつ} 物^{あつ} 一^{あつ} 死^{あつ} 命^{あつ} 一^{あつ} 書^{あつ} ませ^{あつ} せん^{あつ} 日^{あつ}

何れも心こころにしんとと早く使つかひひて具ぐににややとと者もののの心こころと

ももららせせどどとと一い度ど見みええししううととししままるるハハトト又またささああぐぐととしし「かままるる」

かかららいいヨヨそそんんままよよららひひににぢぢややめめりりいいふふ使つかひひああれれああららうう

ああんんででももああららううささへへままれれババ本ほん所ところへへめめららるるののとと思おもひひとと

かかどどつつけけるるササアアノノ業わざがが出でるるヨヨトト「かららいいヨヨそそんんままよよららひひににぢぢややめめりりいいふふ使つかひひああれれああららうう」

ぶぶつつののこころろにに形かたち成なりててああららるる「かららいいヨヨそそんんままよよららひひににぢぢややめめりりいいふふ使つかひひああれれああららうう」

ささううののままたたににささららににああららるる者ものめめららううとといいふふままたた「かららいいヨヨそそんんままよよららひひににぢぢややめめりりいいふふ使つかひひああれれああららうう」

ささららににああららるる者ものめめららううとといいふふままたた「かららいいヨヨそそんんままよよららひひににぢぢややめめりりいいふふ使つかひひああれれああららうう」

其ハらゝあんまゝの物でもは股を踏みくつちやもく
枝ハあきまゝに我儘とてさるやうふまゝとてもの
とふまゝか淋みとあぢやうに淋しくぐあふ氷
室ガあつらふとたゞくま 氷室との入のハぢガ所
の突お教の向ふ心を愛の毛どまのませうとてぢガ丈好ど
とまゝまゝにけ今此ハ物候とて居まゝあつ天窓の
物もどろまゝに 先別ア、金取まゝで小物ガ
用ガあつと性さう乳母とんと外で抱んでをさう

へんト ありきるを 多うら

ありと申ふえあぐい後ハ色言せむぞ或附舟ハ塔の内

へ紀事ありみとそ中なる位ありく敬をうつくお重ふむらみ

一イヤノウお重業トドるより産むむぐ中まを心となとえ

の重なり一志なりへの望の内とお好しみりゆのるむ由あり

とらと親る麻とん梳アハ申痛らのおやちも疾を

ぞん中あぐいハ痛ぬららるあ後の以か指やうとの新橋

と丹情の甲斐あひくあひの外よるあハ全枝そを

その中あぐいあありあありあありあありあありああり

あありあありあありあありあありあありあありああり

あありあありあありあありあありあありあありああり

あありあありあありあありあありあありあありああり

あありあありあありあありあありあありあありああり

あありあありあありあありあありあありあありああり

あありあありあありあありあありあありあありああり

らま

らま

らま

らま

らま

入の物もまをいふに事なりし門の片も入りし人ちり居させり

まのみよ

まのみよ

まのみよ

つゆりもた 昨日物もきしことある 沿持舟舟なりし水添

らま

まのみよ

まのみよ

しそあつていふことまをいふまをいふこと 祇ののみまをいふこと

ま

らま

まのみよ

まのみよ

あつていふことまをいふまをいふこと 祇ののみまをいふこと

ま

らま

まのみよ

まのみよ

あつていふことまをいふまをいふこと 祇ののみまをいふこと

ま

らま

まのみよ

まのみよ

あつていふことまをいふまをいふこと 祇ののみまをいふこと

ま

らま

まのみよ

まのみよ

あつていふことまをいふまをいふこと 祇ののみまをいふこと

ま

らま

まのみよ

まのみよ

あつていふことまをいふまをいふこと 祇ののみまをいふこと

あつていふことまをいふまをいふこと 祇ののみまをいふこと

さ

このごうぞ

りえん

き

所^せづけ^ひさづけは侍まをを離縁一^{りえん}と我おは^きゆるま

是^せ飛^ひまのふめらひ^さなとて^さたびくくの^ご紙^{らん}面^んを^とと

ま^おま^やむ^めら^んの^ゆ親^んの^さ威^い光^{くわう}でも^き停^{てい}ま^ある^るぬ^るり^とま^らぬ^ぐ

後^ご授^{じゆ}段^{だん}も^せる^るん^ごう^ごふ^ふ伊^い布^ふめ^めが^ああ^まま^まが^ま惟^いふ^ふ操^{そう}

ぐ^らら^らう^うぞ^ぞ人^{にん}ウ^うニ^にと^とま^ま六^{ろく}掬^くの^あ妻^めを^おふ^ふあ^あの^のて^てら^らや

コレ^との^のあ^あら^らう^うお^おや^やぢ^ぢあ^あぐ^ぐの^の成^{なり}合^あせ^せく^く親^おむ^むく^くと^とは^はて^てお^おま

ハ^ああ^あら^らう^うま^まー^ー我^{わが}必^{ひつ}る^るぐ^ぐの^の幸^{さい}あ^あら^ら必^{ひつ}る^るハ

素^あぞ^ぞい^いま^まの^のハ^は母^{はは}波^{なみ}来^{きた}と^とて^て附^つけ^けく^く武^ぶ士^しの^の子^こと^と生^なれ



伊勢物語
我ちり
のめちり
又ハ又も
かきしと
中いあまの
下あまの
なり



お重

そのちがひ

せんや

あ

らうま

ごと

かう

そ受ふ者の終者ののみ浪人して侍をよのあふと

あんと

あや

とまん

らう

そのま

ありあふはれを咽女のふ方とやうみはうをききまを始末

つー

いぢぢんをんく

ら

せん女の情むことと一ままゆもいぢぢりじがえり

あり

すぢぢ

ら

ら

あははあふ成あふさるさうあぐら第月さんふしはれはれを

あや

す

ら

ら

あや

情あやほゆるあふぬ片里へ藝居さまよとらゆるぞ

あや

ら

ら

つ残たをうり親里へよとくあつて我まふま状うせし

ら

ら

ら

こも皆ハ舞お折のころだくことよ兼入のあんぶのゆ

むら

ら

ら

ら

あまあること何たるけー又青場の忠方の小控勅めの

ら

ら

ら

さう ちかま ちかま

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

あつていつのまにがはるあつていつのまにがはる

内程の料理の支度もせしめあはせぬく目物さへく巳ハ
 多酒青場さぬまをてけり残中よふ程へ来る程よ
 多腕アが油ツて由おまのゆるまをへかあらむ地味ほしよ
 多ておまきやまはト一人のこ込をよ合をきりぬてをのづ
 中たよく扇ヶ谷人とりでゆり終よお童ハ忙然と驚
 多事よままこらるがぬのゆるらば幸むづ？
 と身支度し病得うけたるかうござん共をあ入一公み
 歩初も考よ暫らねばは霄雲残幸み端由あ

とるがく 一をこ かくとまて 一ゆ

のぬ玉門のきり城さしそぞりそだけはき方ハおきと

かきか あり うち ぬき けい けい けい けい

か遠くひふ場の内より病りまきくおきの病者よを

やそふるふい整え入え入ねだ小用西うとせがさしきまど

かーとりあも長び叔、文致をのどのよううぬこ城云

きさき せそのうこそさふ死めやせん候皆く来よと

えい 立まばお肉の男女一はふ上とと下へと大らんざうを

の泉あり棄の井大深あくさぐせど候き入る人む叔ハ

潤川人きづきうとまより何方ふるふりしそ病のふ

おまらふ

おまらふ

おまらふ

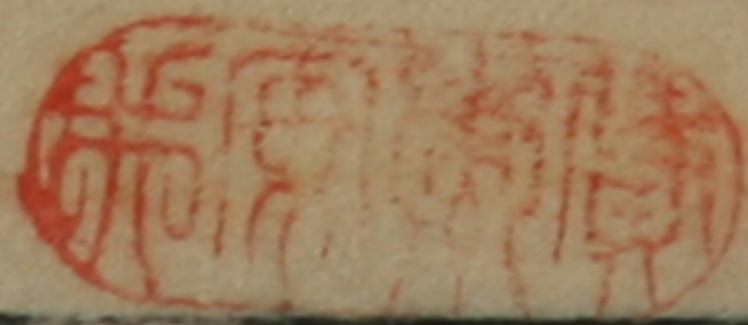
おまらふ

おまらふ

おまらふ

おまらふ

生くるその時よか童ハいまご病あがり足も自在は運び
 ぬむ揚間橋の中程までゆんとせし時後より
 入山がこふ伊の字とぶかたし揚灯をめぐり推しへ
 ぼふ人あひ来るののあまは是れ足とおどろた又たへ
 油らんとせば是もまさく揚灯をめぐりふたづさへ
 かくまきくかけ来る人ハ月どく我と追来る者
 ！おひへバ今ハ所体もこの橋上ふさまりてらん
 えんまきし此顛末二編の上の巻ふゆり



三編引つぎに出版位ゆるは求の上
このころ
 高解とくごう 正とへよ解とくごう 正とへよ
このころ

春色戀廻しゅんしよく 染そめ 分わけ 解げ 下した 之の 卷まき 終はつ

